

久松座名古屋山三元春に比す

留女猿若町二丁目に比す

新富座不破伴左衛門重勝に比す

遠からぬ者は音にも聞

近くは寄て目にも見ず

すの物好は今流行の

館勝作り通ふ芝居の大

本戸をは入れば忽ち糸竹の音も絶せぬ

舞台には花の釣枝花盛り山 歌舞の司と人も

いふ誠や新製久松座歌台ひかきの初めより

尾上の松や難波から彼梅鶴が登り来て頓て

羽をのす帰り咲伴 我を知らずや皆とまが歌

舞妓の初め往古より美に珍らしき繁昌

と萬国諸衆御鬘厚く初日の大入染迄も幕を明れば 忽に雲に稻妻

ガス燈の光り輝く舞台の有様山 其模様とは事替り雨の降日も雪の日も

通ひ詰たる御客さましつほり入るゝ君達を待 くらべ争ふ大入は西に新富伴 東に久松

伴 思ひ競ん向 伊達歌舞舞伴 待ひ待た山 刀の鐙りをとらへしお方こりや此方を

何としめさる これや此方に御免候後身は東京に隠無言世歌舞舞妓の大入と

人もしつたる開化の道此往遠を除すして何で身共が此鞘へ武士の

鞘當接ぎつせへ山 そりや此方より申事大道広き今の世は道は二筋に

立別れ互に除て通ぬぞ開化の御代の道にぞある伴 こそをすなをに通ぬるか

新富座中の達衆の意地山 新富座中と

おいやれとも誠は島原歌舞舞妓の大入伴 その

声音こそ覺へあり昔は其名も賣料座と

併し役者もなまぬるき今新たなる

普請から久松歌舞妓と見た

めはひが目か山 面を

包目開きとて

貴殿の御面ぞう

伴 イノヤ貴殿の其

笠より山 一寸かうして伴 所を

かうして伴 ヤノ思ふに違はぬ久松

元春山 サテこそ新富重勝ぞの

伴 絶て久敷対面に山 場所もあるつに

東なる 世の中なる花の心山 折よく爰で兩人 合またヨナア

山 今行違ひの鞆当が縁となつての此場の仕合今ソソテ其元には

此方に何ぞ用ばじとぞうてか伴 用と申は別義でない是迄訓み重たる御客様を

其方へ今より引と巧 は近頃以て失敬千萬身が御客であればこそ一人たりともやる事

ならぬ山 其義斗りは羅ならん貴殿の方も御訓みなら共前方の書昇座より訓み重ねし

御客一人たりとも此方へ伴 イノヤやらぬは身共が方へ山 客盗人と

相方挑み争ふ折姿は春の後桜年増盛りの別品者右手にちよふちん振さげて裾もほら／＼

駆来り一人が中へ割て入女 まあ／＼待て下さんせ伴 いらぬ女のさへ立山 怪我せぬうちに兩人 退た／＼

女 イエめつたに返やせんテもめつそつな開化の世にお一人さんが刃物さんまへ見れば

まんぢの目見すしつすの御方でもないお一人は新鳥原で時を得し浦美の

花の新富座又お一人は千歳迄色香もかへぬ

久松座しがらむ藤のゆかりあるお二人さんが

此出合お留申おてんは香二本足ららぬ

猿若の二とはながいらぬ野町目

やぶへんに高きはね者に

此場の出入はお二人さん若

井の水にあつさりといふぞ

流して下ろさせ

伴 そりやその方が

挨拶にて女 命に

掛けて御留申御怪

我那にいうち此白刃

山 引といふなら某も

女 そりや私しが言葉を

たつて商人 イカニモ女 流石は

文明開化の御一人心も早くとけ安く伴 色も香もある

其方が扱かひ女 和合は福来の商人 もとひじやナア